

2012年 和本で見る書物史

第5回 書物の歴史 (中世2 印刷の開始)

はしぐち 橋口
こうのすけ 侯之介

和本入門 pp28-42

印刷の実質的な開始は鎌倉時代から始まる

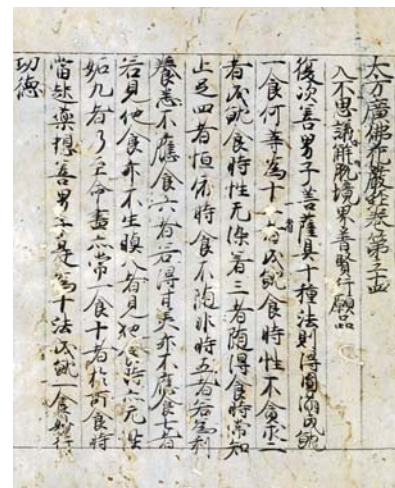
摺経の開始

奈良時代には、『百万塔陀羅尼経(だらにきょう)』一
が作られ、日本最古の印刷物である。以後、200
年間印刷が行われた形跡がない。
供養のために一度にたくさんの経を奉納するこ
とは続いており、手書きの経、つまり写経で
行われていた。



11世紀初頭に強大な権力を握った藤原氏がさらに大規模な供養を
催すようになった。藤原道長の日記『御堂関白記』に寛弘六年(1009)
12月14日「千部の法華経摺り初む」とあって千部供養の儀式があり、
そこで印刷して経を奉納したと載っている。これを摺経とい
う。

平安時代の後半は、写経と摺経がともに盛んだった。右は平安時代の写
経。



経師の仕事

摺経は写経の形式をそのまま木版にして印刷したもので、卷子にする。
この技術は奈良時代からの技術を継いだ経師が担った。奈良時代
大量につくられた写経には、『正倉院文書』によると天平宝字6
年(762)に行われた「大般若経千二百卷」写経のために、「三千七
十六人経師、十二人題師、四百卅二人装幀、七百十八人校生」など
延べ6000人に及ぶ動員をしている。いかに奈良時代の朝廷にと
って写経が重要な仕事だったかを思わせる。

この時の経師とは経を書き写す役の書生のことで、ほかに経
の題を書く役の題師、文字の間違いを指摘する校生がいた。
ほかに紙を用意し卷子に仕立てる(製本する)系の装幀も432
人動員された。

装幀というのは「載って治めることを装といい、染色を潢とい
う」と平安時代初めの法律書に説明されており、写経のために
紙を整えた(打紙)うえで染めて色をつけ(染紙)、定められ
た寸法に截ち切り、界線と呼ばれる文字を書き入れるための枠
や罫を引く仕事をした。さらに写経されたものを軸に巻き、表
紙をつける装訂の細工をすることまでが仕事だった。
平安時代も半ばになると、この装幀という用語は使われなくな
るが、同じ仕事は続いており、写経全般を担う者という意味で
経師というようになった。

平安時代の写経は、奈良時代に劣らず相当な量にのぼり、大規模な写経のさいには数十人規模の経師が動
員された。多くの経師は職人(細工人という)として寺院の周辺で暮らす大衆の身分だった。



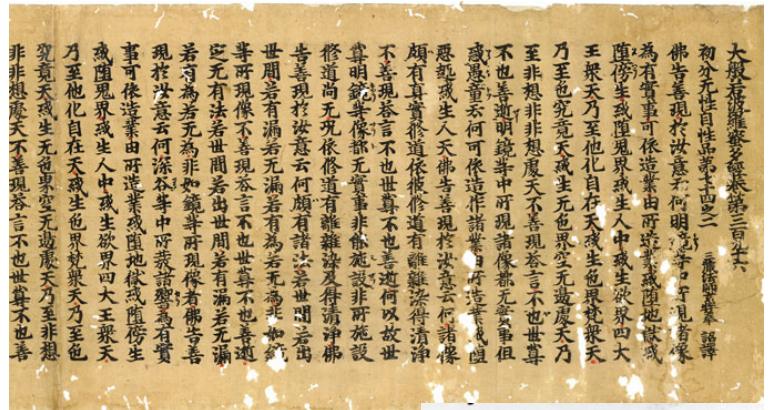
鎌倉時代の経師。頭を丸めて僧侶のような恰好をしているが、職人である。『職人歌合』から。

春日版

この経師がもっていたノウハウは貴重で、そのまま中世全般の書物づくりを担っていた。写経だけでなく印刷にも深くかかわった。

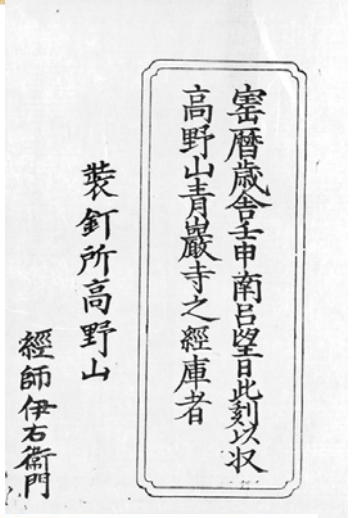
奈良の天台宗寺院・興福寺でも平安時代から摺経が始まるが、鎌倉時代にピークを迎えた。興福寺は藤原氏の氏寺で、氏神が春日大社だった関係で興福寺でつくった摺経を春日大社に奉納した。そのため一般に春日版といわれる。經典だけでなく、仏教教理の研究書（**聖教**という）も刊行され始まる。ここで実質的な書物印刷が始まった

春日版の『大般若波羅密多經』(鎌倉時代刊)→



高野版

真言宗の高野山でも印刷が始まる。最盛期は鎌倉時代中期から。厚手の用紙（高野紙）を使い、空海の伝統を引き継いで粘葉装にしたものが多い。ここでも板木を彫ったり、印刷製本する仕事は経師が担った。山内に住んでいた。右は江戸時代の本の刊記にある経師伊右衛門。ここは鎌倉時代から明治期まで続いた高野山内の経師系の本屋。



宋元の出版物

中国では宋の時代に入ると印刷が飛躍的に発達する（**宋版**）。木版による精緻な印刷、正確な校訂が相まって、後世の手本となるものとな

った。現存するものは貴重である。右図は、現在台湾故宮にある 1180 年刊『東坡先生和陶淵明詩』で製本が**胡蝶装**（日本の粘葉装とほぼ同じ）。これが古い形態である（故宮博物院『宋版図書特展』より）。続く元の時代も宋版の技術を受け継ぎ、盛んに本を印刷するようになった。合わせて**宋元版**という。



五山版

天台・真言といった伝統ある宗派だけでなく、鎌倉時代に中国から伝わった臨済宗でも、その学僧たちの勉強のために中国の仏典をそのまま印刷するようになった（**翻刻**という）。臨済宗は武士の信仰を集めて、京や鎌倉に有力な寺院が置かれ、五山といったので印刷物は五山版という。特徴は、仏教書（**内典**）だけでなく、仏教以外の漢籍（中国の著作物=**外典**）も数多く出版したこと。右図は漢語の事典である『韻府群玉』（南北朝時代刊）。室町時代まで続いた。



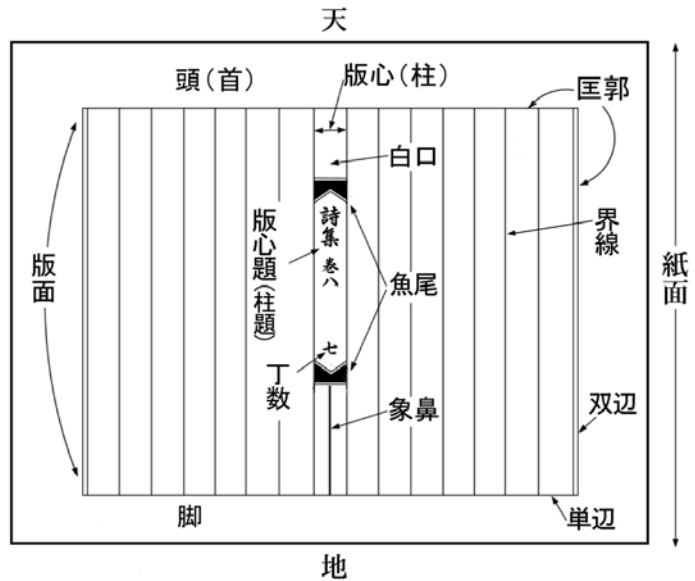
この学僧たちは、自らも漢詩をつくった（五山文学）。鎌倉時代末の虎関師鍊（こかんしれん、1278-1346）はその中でもトップクラス、漢詩をつくるための漢字字典も自ら編集、また日本仏教史というべき『元亨釈書（げんこうしゃくしょ）』も書き、五山版で刊行した。

版式

五山版が高野版などと違うのは外典刊行のほかに、宋元版の様式を踏襲したこと。漢籍のスタイルで本づくりをしたことである。南北朝時代には元から幾人もの刻工が来日して、技術を伝えている。

本文の文字があるところ（版面）を罫線で囲む。これを^{きょうかく}匡郭という。行ごとに線が引かれていれば界線という。これは奈良時代の写経からあった。

特徴は、^{ほんしん}版心と呼ばれる見開きにしたとき（これを1丁という）の中心部分。



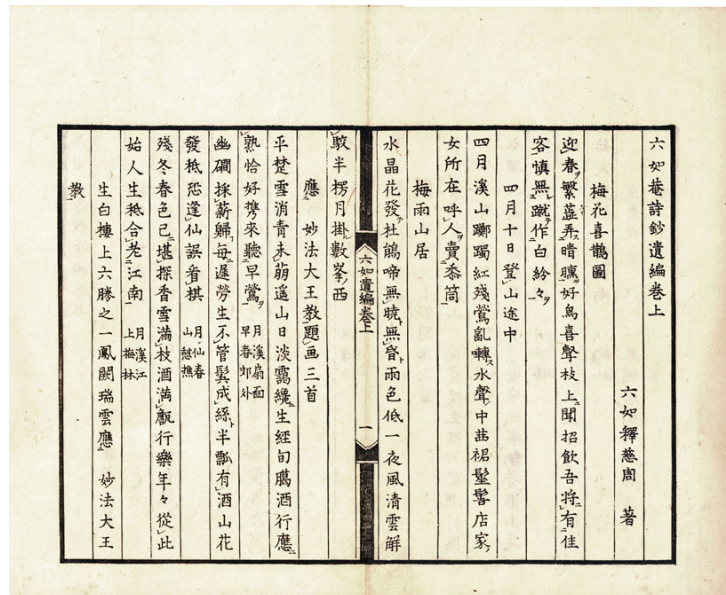
後はここを中心にして折り曲げる。そこに製本する職人のために中心線がわかるようにした（^{ぞうび}象鼻や左右対称の^{ぎよび}魚尾の真中）。

さらに、書名（略記する）や巻数、丁数（^{ちやうづけ}丁付という）も入れておく。

☆ここで培ったノウハウは、江戸時代にもつながる。

右は文政6年刊（1823）の本で江戸時代後期の詩風に影響を与えた日本人僧侶の漢詩集『六如庵詩鈔 遺編』。太い匡郭があり、界線もあって、版心には太い象鼻が上下にあり、魚尾も備えている。

儒学や漢詩などの漢学の本には、日本人が書いたものでも、宋元時代の様式を守っている。



☆中世には物語や和歌などは、印刷されることがなかった。

参考文献

- 中根悟『日本印刷技術史』1999年、八木書店
- 水原堯栄「高野板の研究」(『水原堯栄全集』第一卷) 1978年、同朋舎出版
- 川瀬一馬『日本書誌学之研究』1971年複製、講談社
- 川瀬一馬『五山版の研究』1970、ABA J (日本古書籍商協会)